

Gigantes の運命

— 古代中世ヨーロッパの巨人伝承の変遷 —

大沼由布
同志社大学

要旨

本論で取り上げる巨人表象は、大きく分けて三つの系統に分類できる。第一は、アポロドーロスが紹介するようなギリシア神話由来のオリンポス神族と敵対した巨人族ギガンテスである。次は、プリニウスの記述に代表される、自然が戯れに作り出した周縁の民として、人間の一種としての背丈の大きい存在である。第三には、呪われた血筋の顕現という聖書由来の要素だが、これは巨人とされるネフィリムの訳語として「ギガンテス」が用いられたことにより、古典由来の巨人像との結び付きを強めた。本論はこれらの要素に注目しつつ、古代中世ヨーロッパにおいて巨人伝承がどのように発展したかを論じる。

まず *gigantes* という語は巨人を表す *giant* の語源として知られ、意味が一般化する契機は、ネフィリムの訳語として用いられたこととされるが、用例を確認すると、固有名詞ではなく普通名詞として使われる例は、古典時代にはギリシア語・ラテン語ともに稀であったと考えられる。

聖書の訳語として使われたこと以外に、各種のイメージが融合する一つの契機となったのがセビアのイシドールスである。イシドールスは、ギリシア神話由来の語源と聖書のエピソードとを、つながりを否定しつつも並べて紹介し、巨人という存在について、キリスト教の枠組みの中での場所と意義とを与えた。イシドールス以降の中世百科事典として、『怪物の書』は多くの巨人を紹介し、巨人を怪物の中で最も人に近い存在として描く。また中世最大の百科事典『大いなる鑑』の一角を占める『自然の鑑』では、同じく巨人が人と怪物との境界に立つ存在となっており、大きさだけでなく、傲慢かつ粗野などのマイナスイメージが付与されている。一方で、中世に入っても、少なくとも百科事典的著作では、「ギガンテス」が特定の種族を示す例として使われる例が多く見られ、一般的な「巨人」の場合には、ギガンテスとは名付けられていなかった。

さらに百科事典を典拠の一つとして制作した『マンデヴィルの旅行記』は、聖書由来、古典由来、どちらの巨人像も含み、作品中の目的により使い分けていた。ただし、ギリシア神話で特定の部族として挙げられていたギガンテスは登場せず、ネフィリムと一体化した形でのみの登場となった。また、そこではすでに固有名詞「ギガンテス」ではなく普通名詞が、ネフィリムをさす場合も含めて使われていた。

このように、様々な要素が「巨人」というモチーフの中に混在し、単語としての意味の

変遷とともに、独特の複雑さを形成している。名称の由来となった種族「ギガンテス」よりむしろその後の発展で付け足された要素が主となっている点で、特徴的な変化を遂げていると言える。

キーワード

中世英文学、西洋古典、比較文学、百科事典、旅行記

The Fate of the Gigantes: Tracing the Representation of Giants from Classical to Medieval Europe

Yu Onuma
Doshisha University

Abstract

This paper discusses three representations of giants. The first category involves the so-called Gigantes, who (as depicted by Apollodorus) fight against the Olympian Gods of the Greek myths. The second, as Pliny and his like describe, comprise quasi-humans whom Nature produced to act as playthings inhabiting the margins of the world. The final category contains the portents of the cursed, a concept originating from the Nephilim in Genesis. Focusing on these three classifications, this paper analyses how the literary motif of giants developed from classical to medieval Europe.

A useful starting point might be to examine the word “gigantes” which, as is widely known, is the etymological ancestor of “giants.” The popularisation of “gigantes” is said to have stemmed from its use as a translation of “the Nephilim” in the Septuagint. However, in the classical period, it was rare to use “gigantes” to refer to giants in general. In fact, before the birth of the word “giant,” various catalysts had to be triggered and various images synthesised. For instance, Isidore of Seville juxtaposed the Gigantes from the Greek myths and the Nephilim from the Bible, although he noted that confusing the two is misguided. Nevertheless, Isidore’s alignment of the two forms of giant would result in giants being positioned in the Christian framework.

Encyclopaedias that followed were based on aspects of Isidore’s work. For example, the Anglo-Latin *Liber monstorum* enumerates various giants and considers them to

be the most similar to humans out of all monsters. Likewise, *Speculum naturale*, one volume of the greatest of medieval encyclopaedias: *Speculum maius*, places human-like creatures on a spectrum with human beings at one end, followed by giants and then “weirder” monsters. It was also instrumental in attributing the (now defining) characteristics of arrogance and barbarousness to giants. In addition, just as in works from the classical period, medieval encyclopaedias tended to use “gigantes” to refer to certain people, rather than to giants in general.

Turning to the encyclopaedia-based, *Mandeville's Travels*, images of the Gigantes from both the Bible and classical literature are evident and are used rhetorically for differing purposes in the tale. It should also be noted that out of the three categories identified, the original Gigantes go unmentioned in *Mandeville's Travels*. It does include the episode of the Nephilim (aka Gigantes), but rather than referring to them as “gigantes,” it names them “geauntes,” which signifies “giants in general.” Hence, in *Mandeville's Travels*, all the gigantic races are labelled simply “giants.”

Thus, various literary factors have influenced the broader definition of giants and establish a complex motif along with the development of the word “gigantes/giants.” In a sense, the eponymous “gigantes” loses its original meaning in the end and features added later prevail. This cements the unique characteristics of the literary motif of giants.

Keywords

Medieval English literature, Classical literature, Comparative literature,
Encyclopaedia, Travel narrative

1. 巨人伝承の文学モチーフとしての特徴

「巨人」は大きい。物理的な大きさはもちろんのこと、何を巨人と呼ぶかという範囲が広く、様々な記述がその範疇に含められるため、文学における表象として、バリエーションも多い「大きな」カテゴリーなのである。

その「大きさ」の原因として、一つには、記述者である人間から見て、背丈が異常に大きい存在、ということが基本となるにしても、果たしてどれほど大きいのかについて、具体的な基準がないことが挙げられる。また、名前のついた単体の巨人なのか、種族全体が巨人である一般的な存在としての巨人族なのか、という問題や、巨人族の中にもまた様々な種類、種族がある、という問題も存在する。さらには、偉大さをサイズの大きさへと転換させ、キリストが巨人として描かれる場合など、特定の意図と結び付いた巨人表象というケースもある¹。そして、そもそも巨人を表す *giants* という単語が、ギリシア神話に登場する一種族であった *Γίγαντες* (ギガンテス) からきており、もともと特定の部族をさす単語から、もっと広く曖昧に使われる単語になった、という言葉の面での背景もある。その一方で、特定のエピソードの中に登場する特定の巨人は、一般化して語る事が難しいため、その話の中でだけ登場する限定的な存在にとどまっている。つまりは、巨人表象の中でさらに、特定の巨人、名前や特徴のある巨人部族、特徴的な記述を伴わないより一般的な「巨人」などの区分が想定される。このように特定のものから一般化されたものまで、様々なレベルの記述例が含まれることは、例えばユニコーンやフェニックスのような、種族としての扱いを基本とする、より特定された幻想の存在とは違い、巨人表象の一つの特徴あるいは注意点と言える。

本論では、このように様々なバリエーションを持つことになる巨人が、ギリシア・ローマの西洋古典の時代からヨーロッパ中世にかけて、いかに「発達」していったかを取り上げる。生物についての情報源であり、知識と情報の集約の場である百科事典や、他者との出会いを記録する媒体である旅行記を中心に分析し、巨人の文学モチーフとしての発展とイメージの変遷を示したい²。なお、一般的な文学モチーフとしての例を示すことができるよう、取り上げる例は、固有の「巨人」よりも集合的な「巨人族」を中心とした。

2. 西洋古典における巨人

2-1. 始まりのギガンテス

そもそもの始まりであるギリシア神話の *Γίγαντες* (ギガンテス) は、棲息地域や、岩や木を天に向かって投げて戦ったという行動から、起源は、自然の破壊力、特に火山活動の具現化ではないかと言われる存在である³。ゼウス率いるオリュポスの神々に敵対し、ギガントマキアとして知られる激戦を繰り広げ、敗北した巨人族、というイメージが一般

的なものと言えるだろうが、実際のところ、古代での記述は必ずしもこれに当てはまるわけではない。例えば、紀元前8世紀末のホメロスの『オデュッセイア』や、同じく紀元前8世紀末から紀元前7世紀にかけてのヘシオドスの『神統記』といった、最も古い部類の記述では、ギガントマキアは言及されていない⁴。神々と戦ったという記述は、同じく神々と戦い、巨人でもあったとされる、ティタン神族との混同から起きたのではないかと指摘されている⁵。

ホメロスやヘシオドスに見られるような断片的な言及を超えて、ギガンテスについて、最も包括的な記述を残しているのは、1世紀か2世紀の著作と推定される偽アポロドーロスの『ビブリオテーケー』(Βιβλιοθήκη)である。その中(第1巻第6章)で、ギガンテスは以下のように紹介される。

Γῆ δὲ περὶ Τιτάνων ἀγανακτοῦσα γεννᾷ Γίγαντας ἐξ Οὐρανοῦ, μεγέθει μὲν σωματῶν ἀνυπερβλήτους, δυνάμει δὲ ἀκαταγωνίστους, οἱ φοβεροὶ μὲν ταῖς ὄψεσι κατεφαίνοντο, καθειμένοι βαθεῖαν κόμην ἐκ κεφαλῆς καὶ γενείων, εἶχον δὲ τὰς βάσεις φολίδας δρακόντων.⁶

ティタンたちのために憤ったゲー(大地の女神)はウラノス(天空の神)により、体の巨大さにおいて凌ぐ者なく、力において無敵なギガンテスを生む。彼らは外見という点では見るからに恐ろしく、頭と顎とから濃い毛を垂らしており、足には竜の鱗が生えていた。

神々の子で体が大きく力も強いものの、髪と髭とが長く垂れ下がり、竜の鱗が生えた足を持つなど、醜く恐ろしい外見となっている。この描写は、様々なバージョンのある姿かたちの詳細を除いては、現在まで伝わる一般的なギガンテスのイメージとおおむね一致するものである。さらに、この直後に、この種族とゼウスとの戦いについても、『ビブリオテーケー』は詳細を述べている。これらのことから、アポロドーロスの記述がギガンテスのイメージ作りに一役買ったものの一つであろうことが窺える。

さらに、大地の女神と天空の神の間には、他にも百の手を持つヘカトンケイレスや、一つ目のキュクロプスなど、異形の巨人とされる存在が生まれ、同様に二神の子供であるティタン神族も、既に述べた通り、体が大きかったとされている⁷。ゼウスの支配権が固められる過程において、これらの巨人たちのうち、ギガンテスとティタンは敵対者となり、ヘカトンケイレスとキュクロプスは最終的には協力者となる⁸。つまり、ギリシア神話の世界で巨人は、神々の最初期の敵対者・協力者、どちらの側にも登場しており、倒すべき大きな力と助けになる大きな力、双方を象徴していると考えられる。その中で、のちに巨人の語源となるギガンテスは、結局強力な敵として定着していったのである。

さらには、「ギガンテス」を単語としてとらえ、その用例を確認すると、「巨人」とのつながりと差異双方が見受けられる。ギリシア語の「ギガンテス (γίγαντες)」は複数形であり、辞書に収録される単数形は「ギガス (γίγας)」となるが、この単語は、形容詞として「力が強い」という意味でも用いられており、例えば同系統の「大きい」という意味の形容詞 γιγάντειος という単語も存在している⁹。しかし、それらは派生的で、辞書の説明の大勢では、古典ギリシア語の「ギガス」は通例複数形「ギガンテス」として、特定の種族をさして使うものとなっている¹⁰。さらに、古典ラテン語の辞書を確認すると、辞書によっては、意味の転用例として「大きい」という意味で使われる例が最後に掲載されているが、基本的に「ギガス (gigas)」は、固有名詞として説明される¹¹。実際古代から現代にいたるラテン語テキストのデータベースである Library of Latin Texts (Brepols, 2021) で使用例を確認しても、古典ラテン語の時代は、基本的に「ギガンテス」は特定の部族をさすものとして使われている様子が窺えた。

このように、文学作品において表現しているものと、辞書の中で単語として解説されるものとの双方から考えた結果、「ギガンテス」には、古代ギリシアの時代から、現在の giants に通じるような、固有名詞というより、「大きい」という概念に結び付いた使い方が存在してはいたものの、ギリシア・ローマにおいては、基本的にギガンテスは固有名詞であったと推測できる。同時に、派生的な形容詞の例があることから、体の大きさや力の強さが、巨人イメージの中核となるものとして、この時代から一貫して存在したのではないかと考えられる¹²。

2-2. 辺境の異形の民

ゼウスに敵対したギガンテスという部族とは別に、例えばホメロスの『オデュッセイア』やウェルギリウスの『アエネイス』には、辺境の島々に住む狂暴で野蛮な異形として、キュクロプス、ライストリュゴネスといった人食い巨人たちが登場する¹³。こういった、辺境の異形の民という流れとしては、1世紀のローマのプリニウスもその著書『博物誌』(Naturalis historia) の中で、巨人を何種類か記述している。

そして、ここでは、巨人は人間を主題とする第7巻に登場している。つまり、プリニウスにとって、巨人はあくまで人間の1種として分類される存在だったということになる。『博物誌』第7巻では、名前の付いた単体の巨人や、人間の中で背が特に大きかったという例などを除くと、明確に背丈が大きいと記されている例としては、3種類の巨人族が登場する。それらは、インドやエチオピアの驚異として様々な怪物種族が紹介される章に登場する¹⁴。プリニウスは、この地域は特に驚異が多いと述べており、驚異の例としてインドの動植物はすべて巨大で、それは土壌と水と気候とによるものだとし、その流れのまま、1種類目の巨人族が“multos ibi quina cubita constat longitudine excedere”(かの地の多くのものは背丈において5キュービットを超えると知られている)と紹介される¹⁵。つまりは、すべてが大きくなるこの土地では、人間すら大きくなる、という例とし

て、そこに住む多くの人は、5 キュービット（約2メートル50センチ）を越える身長である、としているのである。巨人として考えた場合、これはそれほど巨大ではないとも言えるが、これを皮切りに、身長が3メートルや4メートルを超える、他の2種類の巨人を含む、多くの異形の種族が続々と紹介され、巨人としては控えめな例から記述を始め、徐々により極端な例に移行したと考えられる。

しかし、プリニウスが残した3種の巨人の記述は、寿命が長いことや体が丈夫であることなど、多少の付加情報はあっても、ほぼ背丈について触れているだけで、3種のうち2種は、部族名も記されていない。章全体として見た場合も、この地域に住む多くの奇妙な種族を挙げているという文脈となり、特に巨人を取り上げて詳述しようという意図は見られない。

結局、この章の主題は、章のまとめの役割をしている“*haec atque talia ex hominum genere ludibria sibi, nobis miracula ingeniosa fecit natura*”（人間の種族のうちこれらとその類を、我々にとっては驚異であるが、自身にとっては遊びとして、才ある自然は作り出した）という文章にあるように¹⁶、多様なものを作り出す自然の力だったと考えられる。つまり、プリニウスにとっては、巨人とは、自然が戯れに作り出し、ヨーロッパから見た辺境に配置した、数多くの異形の人間の1種、という位置付けとなる。そして、背丈以外の詳細は、詳しく規定しなかったため、巨人自身を印象付けるというよりは、自分たちの知る世界と辺境の世界とを区別するための多くの印の一つとして利用したと言うことができよう。同時に、西洋中世の博物学的情報源の一つとして大きな存在感を持つプリニウスの『博物誌』において、背丈以外の詳細がないことは、逆説的に、巨人伝承に柔軟性や自由な発展を許したとも言える。

また、プリニウスはこれらの部族を紹介する際、その背丈を述べるだけで、「ギガンテス」という言葉とこれらの部族とを結び付けてはいない。さらに、『博物誌』の第33巻や第36巻では、特に主題としてではないものの、上述のアポドーロスが紹介しているような、本来の種族としてのギガンテスをさして使っていると考えられる使用例がある¹⁷。つまり、前項で確認した通り、「ギガンテス」という語は、普通名詞としての巨人ではなく、特定の種族をさして使われていたのである。このことから、先ほど取り上げた、『博物誌』において人間の一種として紹介される巨人は、ギガンテスとは異なる存在だったと理解される。

3. 聖書における巨人とその影響

3-1. 七十人訳聖書とギガンテス

「ギガンテス」という単語の意味の広がり契機は、時代としてはプリニウスより遡って、紀元前3世紀の七十人訳聖書（Septuaginta）に求められる。本論集で高井や勝又が

ふれているように、聖書に登場するネフィリムやレファイムの訳語として、「ギガンテス」が使用されたためである。

οἱ δὲ γίγαντες ἦσαν ἐπὶ τῆς γῆς ἐν ταῖς ἡμέραις ἐκείναις καὶ μετ' ἐκεῖνο, ὡς ἂν εἰσεπορεύοντο οἱ υἱοὶ τοῦ θεοῦ πρὸς τὰς θυγατέρας τῶν ἀνθρώπων καὶ ἐγεννώσαν ἐαυτοῖς· ἐκεῖνοι ἦσαν οἱ γίγαντες οἱ ἀπ' αἰῶνος, οἱ ἄνθρωποι οἱ ὀνομαστοί.

gigantes autem erant super terram in diebus illis postquam enim ingressi sunt filii Dei ad filias hominum illaeque genuerunt isti sunt potentes a saeculo viri famosi.

There were *giants* in the earth in those days; and also after that, when the sons of God came in unto the daughters of men, and they bare *children* to them, the same *became* mighty men which *were* of old, men of renown.¹⁸

これは、本論集で黒川も言及している、創世記第6章4節のネフィリムについての記述だが、上から、ギリシア語の七十人訳聖書、ラテン語のウルガータ聖書、英語の欽定訳聖書となっている。それぞれ下線部が、問題のネフィリムを訳した部分で、ギリシア語・ラテン語ともに、「ギガンテス」という単語が使われ、そこから英語では *giants* となっている。このように聖書の訳語に使われたことが、のちの単語としての一般化につながる変化をもたらしていくことは、*Oxford English Dictionary* の *giant* の語源の項でも説明されている¹⁹。また、前出のデータベース *Library of Latin Texts* で実際の用例を調べても、中世ラテン語では、「ギガンテス」やその派生語が、より広く、巨人一般にも使われるようになってきていることは裏付けられた。中世ラテン語の辞書の説明でも、体の大きな人間という定義も加わったり、関連語が、巨人一般をさす語として説明されたりもしている²⁰。

ネフィリムについては、本論集の高井や勝又による論で専門的に取り扱われるためここでは詳細は割愛するが、それがさし示す存在を考えた場合、当然ネフィリムとギガンテスとの間に直接のつながりがあるわけではない。その言葉から人々が連想する体の大きさとそこからくる力強さ、それらに伴う穏やかならざる性質などといったものから、イメージ上の共通項などもあって置き換えとして選ばれたと推察できる²¹。つまり、ここで、のちの単語としての一般化につながるだけでなく、古代から存在していた種族としてのギガンテスの存在そのものよりも、それに付随するイメージ部分がより拡大されていく素地が既にあったことが窺える。

3-2. 『語源論』におけるギガンテス

さらに、聖書と並んで西洋中世の巨人のイメージの一端を決める重要な役割を果た

したと考えられるのが、7世紀のセビリアのイシドールスによる百科事典、『語源論』(Etymologiae)である。ここで、巨人ギガンテスは徴、前兆という意味の *portentum* という分類の下に紹介される。これは、イシドールス自身の記述によれば、神の意志により何かを示すため、自然からはずれたように見える形に作られた人間や生物をさす²²。この *portentum* として、ギガンテスとともに『語源論』で取り上げられるのは、体が人間で頭が犬というキュノケファロイと、一つ目巨人として知られるキュクロプスであり、どちらも古代ギリシアからの伝統を持つ怪物である。キュクロプスだけでなく、キュノケファロイも中世では巨人とされた部族であり²³、どちらも、犬の頭や一つ目という要素から、伝承によっては単に体が大きいだけのギガンテス以上に、異形という要素が強いと言える。これらをまとめて扱い異形の種族のバリエーションとする記述は、後述する『大いなる鑑』のような西洋中世の他の百科事典的著作にも引き継がれ、人間と怪物という種族をまたぐ存在として、巨人を異形の一族の一種として位置付ける考えを形作っていった。

そして、イシドールスが行ったもう一つの大きなことは、聖書と西洋古典のギガンテスのイメージを並べて紹介したことである。『語源論』のギガンテスについての記述は、語源を語る書物らしく、ギリシア神話のギガンテスの誕生になぞらえ、“*γηγενεῖς ... id est terrigenas*” (「ゲーゲネイス」、つまり大地から生まれた者) と解説することから始まる²⁴。そして続けて、間違いであるとしながらも、前述の聖書のネフィリムのエピソードと思われるものに言及しつつ、ギガンテスが墮天使から生まれるとの解釈を掲載する。

*Falso autem opinantur quidam inperiti de Scripturis sanctis praevaricatores angelos cum filiabus hominum ante diluuium concubuisse, et exinde natos Gigantes, id est nimium grandes et fortes viros, de quibus terra completa est.*²⁵

しかし聖書についての造詣が浅い者たちは、大洪水前に墮天使が人間の娘たちと関係を持ち、ギガンテス、つまり並外れて巨大で力の強い者たちが生まれ、彼らによって大地が満たされたと、誤って考えている。

このように、イシドールスはここで、聖書のギガンテスと古代ギリシアから連なる西洋古典のギガンテスの伝統を同一カテゴリーにまとめて紹介している。さらには、ギガンテスという存在を、体が大きく力が強い者たちと定義付けていることは、固有名詞の「ギガンテス」から「巨人」という一般化への道筋もつけたと言えるのではないだろうか。こうしてイシドールスは、否定しつつも結果としては聖書と古典の伝統とを結び付け、さらに、「巨人」の存在に、キリスト教の枠組みの中での場所と意義とを与えた。

4. 西洋中世の巨人の例

4-1. 『怪物の書』の人型怪物

こうして、ギリシア神話に端を発する巨人種族ギガンテス、ホメロスやプリニウスなどの伝統に連なる辺境の異形としての巨人、聖書のネフィリム由来の巨人（ギガンテス）、という三つのイメージを内包するようになった「巨人」は中世でも様々に描写されていく。

まずは、イシドールスを典拠の一つとして、7世紀後期から8世紀初期に成立したとされるアングロ・ラテン文学作品で、怪物を次々と紹介する『怪物の書』(*Liber monstrorum*)に注目したい。この作品は、網羅的な百科事典ではなく、怪物のみに特化しており、第1巻が人間の中の怪物例として怪物種族を列挙し、中でも特に巨人の例は数多く挙げている。人間との差が少ない例から始めるとして、人型の怪物に続き、動物型、蛇型、と紹介していく。

その書物なりの分類を持って、主題を整理して説明していく、という点においては、『怪物の書』はその他の百科事典的著作と軌を一にしているが、本書は、記述の背後にある姿勢が特徴的である。まずその制作動機は序文で以下のように説明される。

De occulto orbis terrarum situ interrogasti et si tanta monstrorum essent genera credenda quanta in abditis mundi partibus.²⁶

全世界の秘された部分について、及び、世界の隠された地域に存在するとされる怪物種族が、信じるに価するか否か、貴方は尋ねた。

つまりは、何者かの質問に答える形で、世界の秘密について記録し、それが信じるに足るかどうかを判断してもらうために編纂したのである。その背景として、序文ではさらに、“Quaedam tantum in ipsis mirabilibus uera esse creduntur”（驚異自体の中で真実だと信じられるものは幾ばくかに過ぎない）と述べ、“de his primum eloquar quae sunt aliquo modo credenda et sequentem historiam sibi quisque discernat”（まずある程度は信じられるものから話すが、続く記述については各自自ら識別してほしい）としている²⁷。つまり、驚異として語られているものの中で信じられるものは少なく、信憑性の高いものから紹介はしていくものの、最終的に信じられるものかそうでないかという判断は、読者自身が行うことを求めているのである。このように、この作品は、多くの怪物を紹介しているものの、どちらかと言えばそれに否定的な立場で、疑うべきものと考えていることになり、驚異を扱う書物としては異色とも言える。

また、怪物たちの数についても、時代の変遷とともに移り変わっていると明記してい

る。序文において、かつては人間にも様々な変種があったものの、人間が増えた今となつては、“minus producuntur monstra”（怪物はより少なく生産されている）、つまりは誕生が減っている、と述べているのである²⁸。この考え方に関しては、例えば、既にホメロスが、人間の体は時代が下がって小さくなったと嘆いている、というエピソードをプリニウスも紹介しており²⁹、思想自体は特に新しいものではない。ただし、序文において世界の秘密について記述するとされていたことを鑑みると、『怪物の書』の巨人たちは、人間が説明や制御をすることができない現象と結び付けられていたと考えられる。時代がたつて巨人の数が減ったということは、そういった世界の中の制御不能部分は減っていったということ、象徴的に表していると言えよう。

さらに序文の記述から、『怪物の書』の中の巨人の位置付けも理解できる。人間との差が少ない怪物からより姿かたちの異なる怪物へ、という順序で記述される一連の怪物の中で、初めに紹介される、巨人を代表とする人型のものは、当然「人間」という存在に最も近いとされる。それだけでなく、上述のように、作品中で初めのうちに紹介されたものは、驚異の中では比較的信じるに足るものでもある。つまり、ここでは、巨人は、怪物としては最も人間に近く存在の信憑性が高い、両者をつなぐあるいは隔てるものとして、人と怪物との境界に立つ存在として扱われている。

また、多くの巨人が登場する『怪物の書』だが、基本的に、巨人をさして homo（人間）と言っており、それに具体的な背丈を付け足すことで巨人とわかるような形で紹介している³⁰。人間を表す homo ではなく gigantes という単語を使った例は、一つしか存在しない。

*Gigantes enim ipsos tam enormis alebat magnitudo ut eis omnia maria pedum gressibus transmeabilia fuisse perhibeatur. Quorum ossa in litoribus et in terrarum latebris, ad indicium uastae quantitatis eorum, saepe conperta leguntur.*³¹

まことにギガンテス（巨人たち）は莫大な寸法へと成長していたため、彼らにとってすべての海は足で歩いて横切ることができたと言われている。その骨が岸や大地の窪みに、彼らの巨大な背丈を示すものとして、しばしば発見されると書物にはある。

ここでは、かつての gigantes は海を歩いて渡れるほど巨大で、本論集の山中が論じる例を思わせるように、今ではその骨が、その大きさを想像する手がかりとなる、としている。一般的事実を述べるような、特定のエピソードとは結び付かない例であるため、固有名詞とも普通名詞ともとれる使い方となっている³²。いずれにしても、10以上の巨人が紹介される中、この一例しか gigantes という単語が使われていないことを考えると、この作品の傾向でも、巨人を表現する一般的な語として「ギガンテス」が使われているとは

言えない。

4-2. 『大いなる鑑』

次に西洋中世に継承された古典の知識の結晶として、中世最大の百科事典と言われる『大いなる鑑』(*Speculum maius*)を取り上げる。これは、フランスのドミニコ会士ヴァンサン・ド・ボーヴェが13世紀に編纂した、当時得られる限りのすべての情報を整理して収めた、非常に大部なもので、本人が編纂しただけで3部、後世の付け足しも入れると4部に分かれている。

ここでは、『大いなる鑑』の中でも、自然界の事物を主題とする『自然の鑑』(*Speculum naturale*)と呼ばれる第1部に含まれるギガンテスの例を見ていく。ギガンテスは、人間について扱った第31巻に登場するため、まずは人間と位置付けられていることが確認できる。文脈としては、怪物種族についての一連の記述の中に登場するが、先ほどの『怪物の書』と同じく、怪物種族の中でも巨人が初めに紹介されている。この巻は、まず通常の人間の話から始め、怪物種族の直前には、実際目撃されたとされる背丈の異様に大きい人間を紹介している。つまり、『怪物の書』同様、通常の人間に近いものから遠いものへ、という配置であることが窺え、巨人が怪物種族の中で最も通常の人間との距離が近いものであることが再確認できる。

実際のギガンテスの記述では、第127章で、イシドールスの『語源論』同様、ギガンテス、キュクロプス、キュノケファロイ、という3種類の巨人がともに紹介されており、それぞれについて、様々な記述が引かれている。ギガンテスについては、前出の『語源論』の記述がまず引かれ、続いて創世記への注解が取められている：“Sunt autem gigantes homines potentes, immanes corporibus, superbi viribus, inconditi moribus”³³ (そしてギガンテスは力が強い人間で、体は巨大、性質は傲慢、振る舞いは粗野である)。ここは、前出の七十人訳で示した創世記第6章4節に対する注解と考えられるが、体の大きさ、性質、振る舞いについて説明し、ギガンテスとは何かを理解する助けとしている。そして、この記述が、ギリシア神話のギガンテスと聖書のネフィリムの訳語としてのギガンテスを並列に置いた『語源論』の記述に続くため、これらがすべて合わさり、神話のギガンテスと聖書のネフィリムをより強く結び合わせ、且つ傲慢で粗暴というマイナスイメージを植え付ける役割を果たしている。ただし、記述姿勢としては、客観的に情報を伝達するスタイルであり、例えば、巨人は傲慢の象徴である、というような寓意的な解釈は書かれていないことは、注意すべきである。

さらに、オンラインデータベースである SaurCencyMe に所収のバージョンだけではあるが、『自然の鑑』の中の *gigantes* という単語の用例を確認した結果、種族としてのギガンテスを表す例と、聖書のネフィリムの訳語としての例との2種であることが窺え、この複数形の形では、一般名詞の巨人をさすものとして使われていない可能性が高いこと

がわかった。つまり、少なくとも、ここでもギガンテスは、基本的に、普通名詞ではなく特定の巨人種族を表すものと認識されていたと考えられる。特に種族名のない、背丈の異様に大きい異形の人間も『自然の鑑』の他の章で紹介されているが、そちらについては、『博物誌』や『怪物の書』同様、具体的に背丈がどれほどかを書き記すことで、巨人であるということを示す形になっており、gigantes や単数形の gigas という言葉は使われていない³⁴。一方で、ヘラクレスや後述するニムロドといった神話や聖書の登場人物をさして単数形 gigas が用いられる例は『自然の鑑』にも存在するため、単数形は一般名詞としても用いられていることが確認できる³⁵。また、『自然の鑑』同様『大いなる鑑』を構成する4部のうちの一つである『歴史の鑑』や、ドミニコ会士トマ・ド・カンタンブレによる同時代の百科事典的記述である『自然の事物について』では、gigantes を普通名詞の巨人として使っていると考えられる例も見受けられるため、複数形も、百科事典の文脈で一般名詞として使われていなかったわけではない³⁶。ただし、当時存在するすべての情報を集めようとした『大いなる鑑』の中の、自然界を記述する『自然の鑑』で複数形 gigantes が普通名詞として登場しない、あるいは少なくともその用例が少ないということは、「ギガンテス」という単語が、中世でもまだ、固有名詞として特定の種族を表すものという認識が強かった可能性を示していると言えよう。

4-3. 『マンデヴィルの旅行記』

このようにギリシア語とラテン語の世界で発展してきたギガンテスの末裔として中英語の geant が、現代英語の giant につながるものとして登場するが、具体例として、『大いなる鑑』を典拠の一つとした、14世紀の架空の旅行記『マンデヴィルの旅行記』(Mandeville's Travels) を取り上げたい。『マンデヴィルの旅行記』に巨人は複数登場するが、それらを整理すると下表のようになる。

表：『マンデヴィルの旅行記』の巨人描写³⁷

章	場所	内容	備考
5	ヤッファ	大洪水前に幽閉された大巨人アンドロメダの肋骨を紹介	神話の誤解
6	バビロン	ニムロド、バベルの塔、偶像崇拜	直接巨人との描写はない
9	ヘブロン	かつてペリシテ人の都があり、巨人が住んでいたこともある	ゴリアテ関連?
22	インド洋の島	一つ目巨人、生肉と生魚のみ食す	怪物種族の一つ
24	バビロン	巨人ニムロドとその子孫の怪物種族(巨人を含む)	ネフィリム
31	「インド」の島	獣の皮を身につけ、家畜を飼い、家を持たない大巨人。人肉を好み、船を見つけると海に入って人を捕らえる	奇妙な種族が連続して紹介される
31	「インド」の島	上の例よりさらに大きな巨人。大きな羊を飼い、船から人をさらって食べる	奇妙な種族が連続して紹介される

ブリニウスの東洋に住む奇妙な種族と、聖書由来の呪われた民と、どちらの記述もあるが、元来のギガンテスは登場していない。聖書のネフィリムと一体化した形で間接的なギガンテスのイメージのみが残るが、そこにおいても、後述するようにすでに普通名詞の *geant* が用いられており、元のギリシア神話の存在は限りなく希薄になっていると言えるだろう。通常『マンデヴィルの旅行記』に登場するギリシア・ローマ由来の文学モチーフは、古典の記述に沿ってそこから敷衍したものとなっているが、巨人に関しては、イメージ上のつながりはもちろんあるものの、種族としてのギガンテスなど、古典から直接発展したと考えられるものは登場しないことが特徴となっている。

さらに、古典由来の異形の民のイメージと、聖書由来の呪われた民のイメージの二つが認められるが、これらが一つの記述に融合するというよりは、記述によりどちらが強くなるかが異なっている。これは、『マンデヴィルの旅行記』が、全34章のうち第15章までがイングランドからエルサレムまでの道程を記した巡礼の手引きとしての側面を持っていることと、第16章以降がエルサレムを越えた未知と言っても良い土地である、東洋の驚異を紹介するものとなっていることに関係していると考えられる。基本的には、聖書の巨人は確認される事実として前半に、古典の巨人は観察される他者として後半に登場しているが、完全に分かれているわけではなく、また、比較して、登場数が多いのは、驚異としての巨人たちとなっている。

まず、物語前半に登場する巨人3種は、いずれも否定的イメージを持って描かれている。さらに、そのうち2種は聖書由来のものである。一つだけ異なるのは、第5章の巨人で、ギリシア神話の誤解から生じたものだが、ノアの大洪水よりも前の時代に幽閉された巨人、と説明されている³⁸。つまり、聖書的な世界観の中に位置付けようとしていることが窺える。これは、巡礼の手引きである作品前半が、多くのことを聖書と関連付けて語る傾向にあることと重なると言える。残りの二つのうち、第6章のニムロドについては後述するが当然聖書の登場人物であり、第9章の巨人も、ペリシテ人の都に巨人たちが住んでいたこともあったとの紹介であるため³⁹、ペリシテ人の兵士ゴリアテから発展した、純粋に聖書のイメージだと考えられる。このように、『マンデヴィルの旅行記』前半の三つの巨人の例は、幽閉された巨人、バベルの塔を建てたとされるニムロド、イスラエルの敵ペリシテ人、などいずれも否定的イメージを持って描かれるとともに、全体的に、聖書と結び付けた上で否定的な存在として紹介する姿勢となっている。

さらに、より数の多い、後半の「辺境の怪物種族」である巨人たちも友好的な存在とはなっていない。後半に登場する巨人は4部族だが、まず第22章の例は、怪物種族の一つとして、基本的には、集合的な驚異の一つとして紹介され、単体で印象付けるような書き方はされていない⁴⁰。あくまで驚くべきものの一つにすぎず、集合的に、他者性や異境性を演出する道具の一つとして用いられている。

同じく辺境に住む異形の民の一員としてではあるものの、もう少し詳しく書かれている

のが、後半に登場する 4 種の巨人のうちの最後の二つである。終盤近くの第 31 章で、悪魔の住むという危険な谷を越えた場所にある、数々の島に住む人々が紹介される部分で、その一環として、2 種類の巨人が登場する。...

Afther this beyonde that vale is a gret yle where the folk ben grete geauntes of xxviii. fote longe of xxx. fote long. ... And thei eten more gladly mannes flesch thanne ony other flesch. ... And yif thei seen a schipp and men thereinne, anon thei entren into the see for to take hem.⁴¹

And men seyden vs that in an yle beyonde that weren geantes of grettere stature, And men han seen many tymes tho geauntes taken men in the see out of hire schippes and broughte hem to lond, ii. in on hond and ii. in another, etyng hem goynge alle raw and alle quyk.⁴²

一つは、身長が 30 フィート、つまり 15 メートルほどもある巨人で、毛皮をまとい生肉を食べ、家畜は飼育するものの住居は持っていない、という原始的な生活を送っている。さらに引用部分後半にもあるように、人肉を最も好んで、人間を見かけると襲ってくる野蛮人となっている。次に並べて紹介されるもう一種の巨人は、身長はさらに大きく、先ほどの巨人同様人食いの習慣を持っていて、海に入って船から人を食べる様子が何度も目撃されていると述べられている。これらの巨人伝承の出典は、Deluz は『大いなる鑑』の一部である『歴史の鑑』第 1 巻 93 章ではないかと指摘しているが⁴³、該当部分はこの記述とそれほどはつきりとした類似を見せず、あくまで可能性にとどまっていると言える。直接記述が関係するわけではないが、少なくともイメージとしては、ホメロスの『オデュッセイア』に登場するキュクロプスやライストリュゴネスを思わせる、未開の地に住む人食い巨人の系列に連なるものになっている。こういった、辺縁に住む野蛮で凶暴な異形の民、という巨人像を引き継いで、地理的、概念的な距離感や、暴力的なイメージが強化されていった一例と言えるだろう。

また、『マンデヴィルの旅行記』における巨人の記述の中でも、ニムロドの例だけは、前半（第 6 章）後半（第 24 章）双方に登場している。まず前半にあたる第 6 章では、バベルの塔を建てたニムロドのエピソードとして紹介され、特に巨人であるとは書かれていない⁴⁴。しかしニムロドは、『自然の鑑』の例でもあったように、中世では巨人として知られており、後半に当たる第 24 章に再登場した際には、巨人（“geaunt”）と明記される⁴⁵。

さらに第 24 章では、ノアの息子ハムが、父親が泥酔した様子をあざ笑ったために神に呪われた、残忍な存在として言及され、その孫としてニムロドが登場する。つまりここ

で、呪われた血脈に連なる者として、巨人ニムロドは記述されている。さらには、ニムロドがバベルの塔の建設を始めると、ニムロドの血縁の女たちのもとに、地獄から悪魔がやってきて関係を結び、そこから怪物種族が誕生したという話が紹介される。

And that tyme the fendes of Helle camen many tymes and leyen with the women of his [Nimrod's] generacoun and engendred on hem dyuerse folk, as monstres and folk disfigured, summe withouten hedes, summe with grete eres, summe with on eye, summe geauntes, sum with hors feet, and many other of dyuerse schapp ayenst kynde.⁴⁶

ここでもまた怪物のリストが導入され、それは古代中世に伝えられた典型的な怪物種族を思わせるものだが、それらの怪物の中には、下線をひいたように巨人が含まれている。これは前述した創世記のネフィリムのエピソードと考えられる。ハムから続く神の呪いに加え、バベルの塔の建設という愚行、さらに悪魔の血が加わり、これら一連の記述により、ニムロドもその子孫の巨人たちも、呪われた怪物であるということが強調される。また、西洋中世では、巨人は傲慢の象徴とされており⁴⁷、『マンデヴィルの旅行記』の中で直接的にそういった記述はないものの、ニムロドのバベルの塔の建設は、その背景を思わせる。同じニムロドの話でも紹介の方法が物語の前半と後半とで少し異なり、前半では聖書との関連のみで記述し、後半ではさらに詳しく述べ、怪物種族という古典由来の驚異の一種とからめて紹介しているが、具体的なエピソードが足されたことにより、否定的なイメージはより強まっていると言える。

全体的に見ると、『マンデヴィルの旅行記』の中の巨人は、古典由来と聖書由来のどちらのイメージも再確認しながら、旅行記という文脈に置かれることで、ヨーロッパ的観点から見れば、よそ者であり、観察される他者として描かれていることがわかる。巨人のいる土地は異境なため、自分たちとは違う場所にいるものとして記され、例えば、本論集の岡本が論じたケースのように外敵として戦って追い出す必要はない。しかし、友好的に見ているわけではなく、原始的、人を食べる、神に呪われている、など、大体において否定的イメージが盛り込まれ、他者性の中でも、マイナス面の象徴に使われている。また、種族としてのギガンテスが、イメージとしてはネフィリムに吸収されたと言え、単語としても、普通名詞に置き換わったことで、すべてが一般的な巨人としての描写になったことも、変化として注目に値する。

5. まとめ

「巨人」の歴史を紐解くと、まず、ホメロスに見るような異境の人食い巨人、アポロ

ドーロスがまとめたような神に逆らった巨人種族ギガンテス、プリニウスが記述したような辺境の異形の民、といった複数のイメージが、ギリシア・ローマ時代に存在していたことが確認できた。そこに聖書のネフィリムの訳語として「ギガンテス」が用いられたことにより、単に言葉の問題ではなく、新たなイメージが加わったと考えられる。そして、『語源論』や『大いなる鑑』のような百科事典がネフィリムとギガンテスとの融合をさらに強めていく一方で、『怪物の書』に見るように巨人は人の亜種あるいは最も人に近い怪物として想定されていく。しかし、中世後期、英語で書かれた『マンデヴィルの旅行記』になると、「巨人」を表す普通名詞の発現に伴い、巨人は「人」と記述されることなく、人食に代表されるような否定的な行動をとる存在として、負の側面が強調されて描写されている。こうして、元来異なるものであった様々な背丈の大きい存在を *gigantes* 由来の *giants* として一括りとするようになったため、曖昧さも内包した広いカテゴリーの巨人が誕生した。

普通名詞として *giants* と記述されるようになるに従い、固有名詞としてのギガンテスのイメージは、聖書の訳語に当てられたほうに集約され、それとともに、体が大きく狂暴な存在、という一般化されたイメージを持つ「巨人」が、他者の象徴として描写されるようになっていったと考えられる。特定の種族としてのギガンテスは、聖書でネフィリムの訳語となったときから、別イメージと融合していき、その一方で、プリニウスが語ったような背丈の大きい辺境の異形としての一般的存在も生き残り、最終的に、ギガンテスから一般名詞の *giants* として記述されるに至り、当初のギガンテスのような大きさや力の強さ、敵対性を残しつつも、それとは異なる存在として、融合して定着した。モチーフの発展として、複数の存在を吸収しつつ、最後には、発展の過程で吸収したもののほうが主となってイメージを形作り、当初の存在は名称こそ残したものの、本質としては変化した、という形の特殊な発展を、「巨人」あるいは「ギガンテス」は遂げたと言える。

注

- * 本論は以下の二つの口頭発表を元に執筆した：(1)「Gigantesの運命—古代中世ヨーロッパの巨人伝承の変遷」、日本中世英語英文学会第36回全国大会企画シンポジウム「ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人族表象の変遷」(ウェブカンファレンス)、2020年12月5日～15日、(2)「異形のカタログ—西洋中世の百科事典的著作における巨人の記述」、オンライン公開シンポジウム「巨人」の場(トポス)、同志社大学一神教学際研究センター主催、2021年11月6日。また本論はJSPS科研費17K02522の助成を受けた。
- 1 巨人としてのキリストについては例えばWilliam Travis, “Representing ‘Christ as Giant’ in Early Medieval Art,” *Zeitschrift für Kunstgeschichte* 62, no. 2 (1999), 167–189 参照。
 - 2 本論が対象とした西洋中世の旅行記や百科事典は、主としてギリシア・ローマ系の影響を受けた記述だが、西洋中世の巨人表象全体で言えば、北欧神話系統の巨人の伝統も影響を及ぼしていると考えられる。
 - 3 “Gigantes,” in *Dictionary of Greek and Roman Biography and Mythology*, ed. William Smith (Boston: Little, Brown, 1867), 2: 267, Making of America, University of Michigan, accessed May 8, 2022, <https://quod.lib.umich.edu/m/moa/ACL3129.0002.001/277?rgn=full+text;view=image;q1=gigantes>.
 - 4 ただし、ホメロスは、話の本筋としてではないものの、ギガンテスのかつての王が一族に滅びをもたらしたことに触れているため、ギガンテスが既に滅びた種族であるということは記録している(Thomas W. Allen, ed., *Homeri Opera*, 2nd ed., vol. 3: “*Odyssae*” *libros I-XII continens* (Oxford: Clarendon Press, 1917), 7.58–60)。なお、ヘシオドスのギガンテスへの言及は『神統記』185–86行に見られ、武器と槍とを装着した強大な存在とされる(Hesiod, *Theogony*, ed. M. L. West (Oxford: Clarendon Press, 1966), 119)。
 - 5 “Gigantes,” in *Harpers Dictionary of Classical Antiquities*, ed. Harry Thurston Peck (New York: Harper and Brothers, 1898), Perseus Digital Library, accessed May 8, 2022, <http://www.perseus.tufts.edu/hopper/text?doc=Perseus:text:1999.04.0062:id=gigantes-harpers>.
 - 6 Apollodorus, *The Library*, ed. and trans. James George Frazer (Cambridge: Harvard UP; London: William Heinemann, 1921), 1.6.1, Perseus Digital Library, accessed May 8, 2022, <http://data.perseus.org/citations/urn:cts:greekLit:tlg0548.tlg001.perseus-grc1:1.6.1>。なお、本論中で引用に付した邦訳はすべて筆者によるものである。
 - 7 ただし、ヘシオドスやアポロドーロスの記述では、キュクロプスやティタンについては、直接的に体が大きいとは書かれていない。
 - 8 『ビブリオテーケー』においては、これらの巨人との戦いあるいは協力は、第1巻第1章および第2章で記述されている。
 - 9 Henry George Liddell and Robert Scott, eds, *A Greek-English Lexicon*, rev. by Henry Stuart Jones with the assistance of Roderick McKenzie, 9th ed. (Oxford: Clarendon Press, 1996), 348–49.
 - 10 いわゆる「ギガンテス」以外の用例としては、J. Diggle et al., eds, *The Cambridge Greek*

- Lexicon*, 2 vols (Cambridge: Cambridge University Press, 2021) にコルクス王アイエテーテスが地面にまいた竜の牙からうまれる存在が収録されている (1: 307)。
- 11 P. G. W. Glare, ed., *Oxford Latin Dictionary*, 2nd ed. (Oxford: Oxford University Press, 2012) は固有名詞としての説明のみで、Charlton T. Lewis and Charles Short, eds, *A Latin Dictionary* (Oxford: Clarendon Press, 1879) には形容詞としての転用例が載っている。
 - 12 ギガンテスの記述については、アポロドーロスの例のように、詳細に関して付け足しがある場合も存在するが、そういった部分は、エピソードの変遷同様、作品によって異なるものとなっており、共通認識とはなり難い。また、それとは逆に、例えば注 4 でも触れたホメロスの第 7 巻 58–60 行の例のように、名前以外にギガンテスという存在についての情報が少なく、体の大きさには触れていない例もある。
 - 13 Allen, *Homeri Opera*, vol. 3: “*Odysseae*” libros I–XII continens, 9.105–566 (キュクロプスとの遭遇), 10.80–132 (ライストリュゴネスとの遭遇); P. Vergilius Maro, *Aeneis*, ed. Gian Biagio Conte, *Bibliotheca scriptorum graecorum et romanorum Teubneriana* (Berlin: De Gruyter, 2009), 89–92 (キュクロプスとの遭遇; 第 3 巻 616–81 行)。
 - 14 この二つの地域は、古代中世のヨーロッパでは、現代世界の地理に対応するというよりは特段の区別なく、東方に広がる異世界の象徴と認識されていた。例えば、Grant Parker, *The Making of Roman India*, *Greek Culture in the Roman World* (Cambridge: Cambridge University Press, 2008), 54 や Pierre Schneider, *L’Éthiopie et l’Inde: interférences et confusions aux extrémités du monde antique (VIIIe siècle avant J.-C.—VIe siècle après J.-C.)*, *Collections de l’École française de Rome* 335 (Rome: École française de Rome, 2004), 15–35 参照。
 - 15 Pliny the Elder, *Naturalis historia*, ed. Karl Friedrich Theodor Mayhoff (Leipzig: Teubner, 1905), 7.7, Perseus Digital Library, accessed May 8, 2022, <http://data.perseus.org/citations/urn:cts:latinLit:phi0978.phi001.perseus-lat1:7.7>.
 - 16 Pliny the Elder, *Naturalis historia*, 7.9, <http://data.perseus.org/citations/urn:cts:latinLit:phi0978.phi001.perseus-lat1:7.9>.
 - 17 それぞれ、Pliny the Elder, *Naturalis historia*, 33.25, <http://data.perseus.org/citations/urn:cts:latinLit:phi0978.phi001.perseus-lat1:33.25> 及び 36.5, <http://data.perseus.org/citations/urn:cts:latinLit:phi0978.phi001.perseus-lat1:36.5>.
 - 18 3 種とも Academic-Bible.com, German Bible Society, accessed May 8, 2022, <https://www.academic-bible.com/en/home/> からで、イタリックは原書、下線は筆者による。
 - 19 “giant,” in *Oxford English Dictionary* (Oxford: Oxford University Press, 2022), accessed May 5, 2022, <https://www.oed.com/view/Entry/78089#eid3155533>.
 - 20 R. K. Ashdowne, D. R. Howlett, and R. E. Latham. *Dictionary of Medieval Latin from British Sources* 3 vols (Oxford: Oxford University Press, 2018), 1: 1348 の “gigas” には固有名詞としての解説に加え、“person of great size” の意味が掲載されている。また関連語については、例えば、R. E. Latham, *Revised Medieval Latin Word-List: From British and Irish Sources* (Oxford: Oxford University Press, 1965), 211 には見出しとして “giganteus”

- (gigantic), “giganticida” (giant-slayer), “gigantulus” (little giant) などが掲載されている。
- 21 White はネフィリムを論じる際身体の巨大さ (“gigantism”) は野生 (“wildness”) の象徴であると指摘している (Hayden White, “The Form of Wildness: Archaeology of an Idea,” in *Tropics of Discourse: Essays in Cultural Criticism* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1978), 161)。
 - 22 W. M. Lindsay, ed., *Isidori Hispalensis episcopi “Etymologiarum; sive, Originum” libri XX*, 2 vols (Oxford: Clarendon, 1911), 2: 11.3.1–6.
 - 23 例えば、Rudolf Wittkower, “Marvels of the East: A Study in the History of Monsters,” *Journal of the Warburg and Courtauld Institute* 5 (January 1942), 175, n. 2 や David Gordon White, *Myths of the Dog-Man* (Chicago: University of Chicago Press, 1991), 52 を参照。
 - 24 Lindsay, *Isidori Hispalensis episcopi “Etymologiarum; sive, Originum” libri XX*, 2: 11.3.13.
 - 25 Lindsay, *Isidori Hispalensis episcopi “Etymologiarum; sive, Originum” libri XX*, 2: 11.3.14.
 - 26 “*Liber monstrorum*: Latin Text,” in Andy Orchard, *Pride and Prodigies: Studies in the Monsters of the “Beowulf”-Manuscript* (Toronto: University of Toronto Press, 1995), 254.
 - 27 “*Liber monstrorum*: Latin Text,” 256.
 - 28 “*Liber monstrorum*: Latin Text,” 256.
 - 29 Pliny the Elder, *Naturalis historia*, 7.27, <http://data.perseus.org/citations/urn:cts:latinLit:phi0978.phi001.perseus-lat1:7.27>.
 - 30 なお、この記述姿勢は、『怪物の書』と間接的に関係する古英語作品『東方の驚異』においても同様で、ここでも多くの巨人が紹介されるが、すべて men とされた上で、具体的な背丈を記して巨人であることが示されている。『東方の驚異』については、Asa Simon Mittman and Susan M. Kim, *Inconceivable Beasts: The “Wonders of the East” in the “Beowulf”-Manuscript*, *Medieval and Renaissance Texts and Studies* 433 (Tempe: Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, 2013) に詳しい。
 - 31 “*Liber monstrorum*: Latin Text,” 286. 下線は筆者による。
 - 32 実際 Orchard はこの部分の Gigantes について、論の中ではそのまま Gigantes と固有名詞扱いで論じるが (*Pride and Prodigies*, 106)、作品に付した英訳では giants と普通名詞扱いにしており (“*Liber monstrorum*: Latin Text,” 287)、扱いが一定ではない。また、Lendinara は、本エピソードはギガンテスを表していると解釈している (Patrizia Lendinara, *Anglo-Saxon Glosses and Glossaries*, *Variorum Collected Studies Series* 622 (Aldershot: Ashgate, 1999), 136)。
 - 33 Vincentius Bellovacensis [Vincent de Beauvais], *Speculum naturale* (Douai, 1624), 31.127.2, *SourcEncyMe: Sources des encyclopédies médiévales*, IRHT, accessed May 8, 2022, http://sourcencyme.irht.cnrs.fr/encyclopedie/speculum_naturale_version_sm_trifaria_ed_douai_1624?citid=cit_id395592407608.
 - 34 例えば、Vincentius Bellovacensis, *Speculum naturale*, 31.126.1, <http://sourcencyme.irht>.

- cnrs.fr/encyclopedie/speculum_naturale_version_sm_trifaria_ed_douai_1624?citid=cit_id395592407482 参照。
- 35 Vincentius Bellovacensis, *Speculum naturale*, 23.28.1, http://sourcencyme.irht.cnrs.fr/encyclopedie/speculum_naturale_version_sm_trifaria_ed_douai_1624?citid=cit_id395592278203 及び 32.4.1, http://sourcencyme.irht.cnrs.fr/encyclopedie/speculum_naturale_version_sm_trifaria_ed_douai_1624?citid=cit_id395592408868
- 36 例えば、Vincentius Bellovacensis [Vincent de Beauvais], *Speculum historiale*, Version SM trifaria (MS Douai BM 797), 28.91.1, SourcEncyMe: Sources des encyclopédies médiévales, IRHT, accessed May 8, 2022, http://sourcencyme.irht.cnrs.fr/encyclopedie/speculum_historiale_version_sm_trifaria_ms_douai_bm_797?citid=cit_id394698294172; Thomas Cantimpratensi (Thomas de Cantimpré), *Liber de natura rerum*, Versions I-II, ed. Mattia Cipriani, 3.4.5, SourcEncyMe: Sources des encyclopédies médiévales, IRHT, accessed May 8, 2022, http://sourcencyme.irht.cnrs.fr/encyclopedie/liber_de_natura_rerum_versions_i_ii_ed_cipriani_en_cours_2017?citid=cit_idp43431584.
- 37 章分けは M. C. Seymour, ed., *Mandeville's Travels* (Oxford: Clarendon Press, 1967) に基づく。
- 38 Seymour, *Mandeville's Travels*, 21.
- 39 Seymour, *Mandeville's Travels*, 48.
- 40 Seymour, *Mandeville's Travels*, 147.
- 41 Seymour, *Mandeville's Travels*, 205.
- 42 Seymour, *Mandeville's Travels*, 206.
- 43 Christiane Deluz, *Le "Livre" de Jehan de Mandeville: Une "géographie" au XIVe siècle* (Louvain-la-Neuve: Institut d'Études Médiévales de l'Université Catholique de Louvain, 1988), 486.
- 44 Seymour, *Mandeville's Travels*, 28.
- 45 Seymour, *Mandeville's Travels*, 160.
- 46 Seymour, *Mandeville's Travels*, 160-61; 下線は筆者による。
- 47 例えば、“The Giants,” in *Classical Myths and Legends in the Middle Ages and Renaissance: A Dictionary of Allegorical Meanings*, ed. H. David Brumble (London: Routledge, 1998), 138; Tina Marie Boyer, *The Giant Hero in Medieval Literature*, Exploration in Medieval Culture 2 (Leiden: Brill, 2016), 26–27 などを参照。